

むかしの松山 その1

古代から中世の松山

古代の伊予

「愛媛」とは？

ずっと昔の神話の時代に、愛媛県は「エヒメ」（美しい姫神）、高知県は「タケヨリワケ」（りっぱな若者神）、徳島県は「オオゲツヒメ」（穀物の女神）、香川県は「イヨリヒコ」（穀物の男神）と呼ばれていました。「愛媛」はとても古いことばなのです。

伊予の湯（道後温泉）の始まり

伊予の湯の始まりには、サギが足の傷をなおしに来た湯、スクナヒコナノミコト神を生き返らせた湯という2つの話があります。病気をなおしたり、生き返らせる不思議な力のある湯でした。

伊予の湯を訪れた天皇たちや『万葉集』の歌人たち

伊予の湯は、瀬戸内海にあるすばらしい湯だったので、天皇や『万葉集』の歌人たちが来ました。

軽太子と軽太郎女…1500年くらい前、罪をおかした皇太子の軽太子が伊予に流されました。悲しんだ軽太郎女が待つことはできないと追って来た悲恋物語があります。

厩戸皇子（聖徳太子）…1400年くらい前（飛鳥時代）に伊予の湯に来て、湯のすばらしさをほめて漢詩をよみました。奈良に法隆寺を建てた皇子です。

舒明天皇…飛鳥時代。伊予の湯に后（高明天皇）と来て5か月近く滞在しました。

斉明天皇…飛鳥時代。百済の国を助けるために、九州へ行く途中に伊予の湯に来ました。伊予の水軍の兵を集めるためだったといわれています。

額田王…『万葉集』の歌人。高明天皇の船団が伊予から出発するとき、「熱田津に…」と歌って、兵を勇気づけました。

山部赤人…『万葉集』の歌人。1300年くらい前（奈良時代）に伊予へ来て、伊予の湯のすばらしさと歴史の古さをたたえて歌を詠みました。

※『万葉集』とは、飛鳥-奈良時代の和歌を集めた日本で最も古い歌集です。

古代の四国



道後温泉は
ずっと昔から
みんなに親しまれて
いたんだね。



軽太郎女の歌

（『万葉集』）

君が行き
日長くなりぬ
山たづの
迎へを行かむ
待つには待たじ

あなたが去って、日が
たちました。迎えに行き
ましょう。待つことはで
きません。

額田王の歌

（『万葉集』）

熱田津に
船乗りせむと
月待てば
潮も叶ひぬ
今は漕ぎ出でな

熱田津で船出をしよう
と月を待っていると、満
月が南の空に来た、潮の
流れも九州へ向いた。す
べてがなかった。さあ今
こそ漕ぎ出そうぞ。

山部赤人の歌

（『万葉集』）

ももしきの
大宮人の
熱田津に
船乗りしけむ
年の知らなく

宮廷人たちが熱田津で
船出をした年もわからな
くなりました。

中世の伊予

この かつやく 河野氏の活躍

1200年から400年くらい前(平安~安土桃^{あつちもも}山^{やま}時代)に、伊予(今の松山周辺)では、河野氏という武士の一族が活躍しました。河野氏は、水軍をひきいて瀬戸内海をおさめていました。また、道後温泉の近くに湯築城^{ゆづきじょう}という城^{つく}を造り、ここは伊予の国の政治や文化の中心となりました。



湯築城は今の道後公園の中にあっただよ。

右の人はだれでしょう？

右は一遍^{いっぺん}という人の像です。一遍は1239年(鎌倉時代)に、松山で生まれました。河野一族の子でしたが、お坊さんになって、仏教の勉強をしたり、お寺にもって修行^{しゆぎょう}をしたりしました。そして飢えや病気で苦しむ人たちのために、日本全国を旅してお札^{ふだ}をくばり、念仏^{ねんぶつ}を広めました。

また、太鼓などの楽器をならし、踊りながら念仏をとる「踊り念仏」を広めました。盆踊りはこの踊り念仏から生まれたといわれています。



いっぺんしょうにんりつぞう
←一遍上人立像
(宝殿寺蔵)

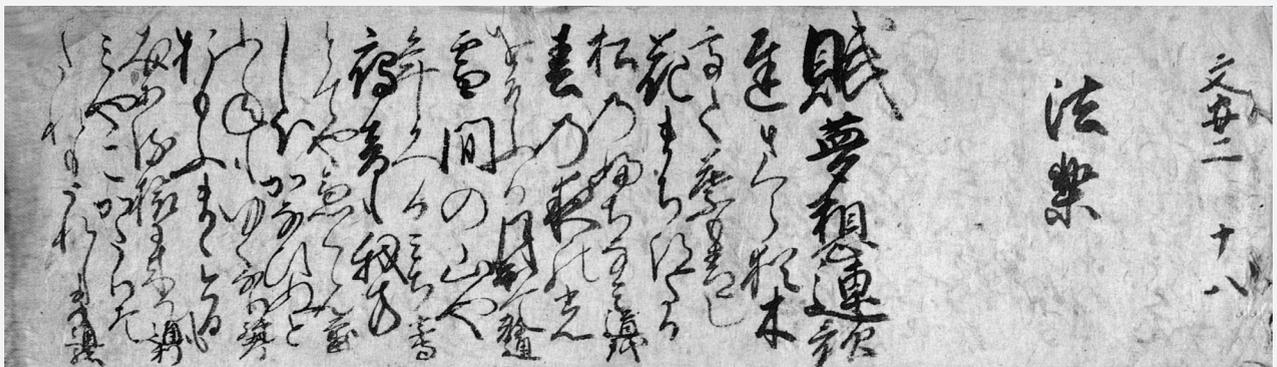
もう こしゅうらい え ことば 蒙古襲来絵詞



800年くらい前(鎌倉時代)に、元^{げん}(今のモンゴルや中国)の軍^{せい}が攻めてきて、日本との間で戦争になりました。この時、河野通有^{こうのみちあり}がながをしながらも大活躍しました。上の絵は、その通有(左)を竹崎季長^{たけざきすえなが}(右)が見舞っている場面です。(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)

展示室で チェック!

おおやまつみじんじゃほうらくれんが 大山祇神社法楽連歌 (複製)



これは、河野氏が今治市の大三島にある大山祇神社に奉納した連歌です。武士や僧侶、庶民も参加しています。連歌は何人かが集まって5・7・5と7・7を別々の人が順番に作ります。これがのちに「俳句」へとつながっていきました。(大山祇神社蔵)